青陵高校
完校記念

翔びたて輝く空へ

SORA校
10年の軌跡

「青陵魂」は永遠に

相武台高校と新磯高校の再編・統合により、2010年4月1日に新磯野の地で産声を上げた相模原青陵高校。これまでに2300人以上の卒業生を送り出し、地域からも愛されてきた同高が、今度は弥栄高校との再編・統合により20年3月31日をもって完校を迎える。「疾風怒濤」の如き歩みを辿った、同高について振り返る。

単位制による全日制普通科高校として、「超え出ることの真理」を理念に掲げ、船出を迎えた相模原青陵高校。自己を表現できる生徒の育成、多文化共生教育の推進、地域との連携などに力を注いできた。生徒が「新たな歴史を作る」べく主体となって活動。学校の愛称である「SORA」やスクールキャラクター「そらちゃん」、シンボルマークや校歌の歌詞も自らの手で生み出した。

特色のある授業も同高の魅力。「創作と表現」「情報とコミュニケーション」「多言語と多文化社会」など5つの「系」に分かれた選択科目が用意され、生徒は自分の興味や関心に応じて選択し、自分の夢の実現に役立ててきた。ダンスアンサンブル、映像作品の自主制作、Webページのデザイン、保育や福祉の現場での実習…、卒業生が多様な進路を選ぶ指針となった。

2010年の開校記念式典

地域を愛し、愛されて

相模原青陵高校を語る上で欠かすことのできないのが「地域等連携教育」。生徒が様々な地域の行事に出向くのはもちろん、地域の人にも表現活動成果発表会に参加してもらうなど、絆と交流を強めてきた。

相武台ふるさとまつり

近隣の相武台だけでも、ふるさとまつりや芸術フェスタ、福祉のつどい、相武台団地祭、クリスマスコンサートなどに参加。ほかにも座間キャンプのパレードや相模大凧まつり、芝ぎくらまつり、橋本七夕まつりにも足を運んだ。2014年には相武台地区四団体代表者会から、地域を盛り上げ、世代間交流を通して感動を与えてくれたと、感謝状が学校に贈られている。

その中心的な役割を担ったのが応援団リーダー部、チアダンス部、吹奏楽部の3部。応援団リーダー部が濁声で送る精いっぱいのエールは、地域の人々に元気を与えた。全国大会出場経験もあるチアダンス部と吹奏楽部は、その確かな技術でイベントに華を添えた。特にチアダンス部は、下級生が入ってこない少人数での活動ながら、3季連続で全国大会出場を果たした。

地域からは、生徒へのこれまでの感謝と、学校の完校を惜しむ声が数多くあがっている。

学校行事にも全力で取り組むのが青陵高校の特徴。新入生オリエンテーションにはじまり、体育祭、文化祭、マラソン大会、表現活動成果発表会「紺碧の旗の下に」など、思い出に残るイベントが多かった。部活動でも輝かしい成果を残した。特にボクシング部の井上尚弥選手は数々の大会で優勝し、青陵の名を全国区に押し上げた。

しかし、16年1月に県教育委員会が発表した県立高校改革実施計画により、20年3月に弥栄高校と統合されることが決定。現在の相模原青陵高校は、その歴史に幕を下ろすこととなった。

今年2月には2つの完校記念行事が行われ、在校生・卒業生の垣根なく「オール青陵」の一体感を余すことなく体現してみせた。その式典でも紹介され、来場者の涙を誘ったある生徒会役員の言葉を最後に紹介する。

「私が生徒会に入ったのは、みんなに青陵高校を統合させたのは間違いだったと思わせたいからです」

体育祭でも常に全員が全力！

会場全体が肩を組んで校歌を歌った完校記念行事

超え出ることの真理 ～歴代校長から皆様へ～

初代校長　片 英治（2010.4～2013.3）

青陵高校は生徒の「表現活動」を中軸におきました。表現するには「場」が必要です。それを地域に求めました。幸いにも生徒の表現活動は、地域の方々に支持されました。表現はその場限りであり、永続しません。しかし、それが表現を感動へと高める契機となります。相模原青陵高校自体がひとつの「表現」となりました。

第2代校長　佐藤 教道（2013.4～2016.3）

社会のステージへ超え出るという理念のもとに開校し、10年で閉校となります。その間、多くの生徒が自ら燃え上がり、周囲に元気を与える力を持つ人間へと成長していきました。SORAの歴史は閉じられますが、青陵生たちの生き生きとした姿は、地域を中心として青陵高校を支えていただいた多くの皆様の記憶に長く留まり続けることでしょう。

第3代校長　杉山 肇（2016.4～2020.3）

卒業生の皆さん、青空を颯爽と舞うツバメを目にしたら、マスコットの「そらちゃん」や青陵で過ごした3年間を思い出してください。地域の皆さま、これまで青陵高校を支援してくださり本当にありがとうございました。学校はなくなってしまいますが、一人ひとりの心の中で青陵高校がよき思い出として生き続けることを願ってやみません。

特別座談会

紺碧の旗の下に集って

語り尽くせぬ「青陵愛」

令和2年3月、完校を迎える相模原青陵高校。その10年に及ぶ軌跡を紹介すべく、卒業生の山本晶さん（3期生）、岡本飛希さん（7期生）、小笠原英紗さん（10期生）に集まっていただき、座談会を開催した。

―本日はお集まりいただき、ありがとうございます。まずは皆さんが青陵高校を選んだ理由からお聞きかせください。

山本　実は他の高校を志望していて、青陵に決めたのは志願変更最終日でした。悩んだのですが、最終的な決め手は制服の可愛さでした（笑）。

岡村　実は僕もギリギリで青陵に決めた口です。

小笠原　私も、もともと余り良いイメージを持っていなくて（笑）。でも、学校説明会で生徒が作った、先生と生徒が校舎の至る所で踊るムービーを見たら皆がキラキラしていて、「ああ、ここは生徒のやりたいことをさせてくれる学校なんだな」と思ったら入りたくなりました。

山本　そのムービー、私も踊りで出演しているの。それが決め手と言ってもらって鳥肌が立ちました。感動です！

―小笠原さんは最後の卒業生。入学時には学校が無くなることが分かっていたんですよね。

小笠原　学校がなくなると聞いても、ピンとこなかったんですよ。先輩と同級生がいればいいかって。でもいざ下級生が入ってこなかったら寂しかったですね。それに3年生になって、それまで過ごした5階に入れなくなった時、実感が湧きました。5階から見る桜が大好きだったので。

山本　めちゃくちゃ分かる～。綺麗だし、適度な田舎感がいいよね。

岡村　僕もよく眺めてましたね。4階と5階だと全然景色が違いますよね。でも5階まで階段上るのキツかったなぁ。

―入学してからの印象はどうですか？

山本　先生たちが若かったこともあって、活気に満ちてましたね。衝撃的だったのは片校長先生。入学式でめっちゃキレて。でも大好きなんですよ。自由にやらせてくれるし、話もためになるし。校長先生がノリノリで体育祭で胴上げされる、そんな学校ってあります？（笑）。

岡村　僕は先生に騙されて応援団リーダー部に入らされたので（笑）。週7で部活してましたね。先生と生徒、先輩と後輩の距離が近くて、まるで家族みたいだなって。先生がつくる雰囲気が、厳し過ぎず緩すぎない、そのメリハリが自分にすごく合ってました。

小笠原　私は2年から吹奏楽部のお手伝いをするようになって。音楽やっていなかったのにハープを任されました（笑）。途中参加なのに受け入れてくれて、団結力もすごく良くて。やってよかったと思いました。でも私の代は、行事が雨のことが多かったかな。

山本　私の時は卒業式で爆破予告があって。1週間延期されたよ。

岡村　そうだったんですか！僕は地域のイベントに色々参加できたのが嬉しかった。井上尚弥さんの祝勝会にも、場違いだと思いながら学ランで参加しました（笑）。

―そういえば皆さん、完校記念式典に参加されたそうですがどうでしたか？

3人　泣きました！

山本　私たちが入学した頃、「日本一、生徒が校歌を歌える学校に」を目指していたのですが、実現しているなと。全員が肩を組んで校歌を歌える学校なんて、そうはない。式典をやってもらえて本当に良かったです。

―先生に対しては？

小笠原　言われること全てに愛がある。未来を考えた上で言ってくれているんだなと。だから、皆さんが大好きすぎて、全員に手紙を書きました。

山本・岡村　すごい！

山本　私も卒業式の日に校長室を訪ねて、「女優になりたい」という夢を語ったなあ。

岡村　怒る前に話を聞いてくれる、何事にも本気でぶつかってくれる。本当に家族みたいな存在。幸せな3年間でした。先生たちの幸せを、心の底から願っています。

山本　私が卒業して年月が経っているのに、先生との関係性が変わっていないのは泣けますね。

岡村　完校は終わりではなくて始まり。これまでの青陵の歴史、生き様を皆さんに刻んでほしい。ここからまた続いていくんですよ。

座談会に参加してくれた（左から）小笠原英紗さん（10期生）、岡村飛希さん（7期生）、山本晶さん（3期生）。「こういう機会を設けてもらえて、初対面でこれだけ話せるのが青陵らしいなと思います」と声を揃える。

完校記念誌を見て大盛り上がり